Interview
2014年7月

横山 由紀子 経営学部 准教授／博士（経済学）

Profile

- 京都大学経済学部経済学科 卒業
- 京都大学大学院経済学研究科
  現代経済学専攻修士課程 修了
- 日本学術振興会特別研究員
- 京都大学大学院経済学研究科
  現代経済学専攻博士後期課程単位取得退学
- 神戸商科大学経済研究所 助手→講師
- 兵庫県立大学経営学部 講師→助教授→准教授

女性が働くということ、そしてその経済的な自立について情報を分析しています。女性が働き稼ぐのが当たり前の社会を実現するには実は意外なところに解決策があります。

Q1. 先生の研究内容はまさにこのハンドブックで伝えたいことそのものですが、近年、働く女性を取り巻く環境は変化しているのでしょうか。

あまり大きな変化はありませんが、近年女性の就業率は上がってきています。それは働く女性を取り巻く環境ではなく、専業主婦を取り巻く環境が大きく変化してきたことがあります。最近は男性1人の収入に頼ることが難しくなってきましたので、多くの女性が働くようになりました。それに伴い女性も働くのが当たりまえという意識が徐々に広まりつつありますが、これは景気が回復すると逆戻りしてしまう可能性もあります。逆戻りしないためには、専業主婦という選択が非常にリスクの高い選択であることを社会全体が認識していく必要があると思います。今、3組に1組が離婚すると言われており、離婚後母子家庭となった時に経済力がないために半数の家庭が貧困状態になっています。そのことで子どもの貧困も増えています。そういった意味で女性が経済力を持つことが非常に重要になってきているのですが、多くの人は「自分たちは大丈夫」「自分たちは離婚しない」と思い込んでいます。

Q2. 女性が働きやすい環境を作るために必要なことは何でしょうか。

女性だけを特別扱いしたり、女性だけを支援したりしているようでは職場環境はなかなか変わりません。女性は職場のお荷物という位置づけにしないためにも、男性を含めてワークライフバランスを進めていく必要があります。特に男性の長時間労働は、家庭に専業主婦の奥さんがいることを前提とした働き方ですので、むしろ男性の働き方を変えていくことが非常に重要になってきます。
国際比較をしますと、女性の就業率が高い国ほど出生率が高いという傾向があります。出生率の低さは女性が働くようになったからではなく、家庭と仕事を両立できない環境によってもたらされていると言うことができます。よって、日本も少子化を含めて色んなことを解決していこうと思うと、社会全体が働き方を変える必要があります。女性が働くのが当たり前、女性の就業継続が当たり前という社会になれば両立しやすい環境も整って、どんどん働きやすくなると思います。

Q3. 先生ご自身も出産や育児を経験されていますが、後輩の皆さんに伝えたいことはどういうことでしょうか。

私は5年生の女の子と1歳半の男の子がいます。世の中では仕事と家庭の両立がすごく大変だというイメージが広まっていますが、二人を育てながら思うのは、実際に大変なのは最初の1～2年だけで、あとは時々大変になるくらいということです。そして、両立しているが故の楽しさや充実感はしっかりあるのですが、それはめったに語られることがないので、両立は大変だというイメージばかりが広がってしまっています。そのイメージに惑わされないで欲しいというのが私の願いです。今働いている人やこれから働く人が両立して楽しく働いている姿を遠慮せず見せるようになれば、必ず次の世代は働くのは当たり前という意識形成ができてきます。働き続けることを誰かに遠慮したり誰かに迷惑をかけていると思わずに、それがみんなの支え合いになるという認識が社会に広がればいいと思います。

Message
「両立は大変」と思い込まないで。
むしろ「楽しさ・喜び・感謝」が
いっぱいです。